

JADS

JAPAN ART DOCUMENTATION SOCIETY
アート・ドキュメンテーション学会

JADS

アート・ドキュメンテーション学会

2023 年度 年次大会 予稿集

2023 年 6 月 17 日（土）・18 日（日）

国際教養大学コベルコホール及びオンライン開催



国際教養大学コベルコホール

画像提供：国際教養大学

アート・ドキュメンテーション学会 2023年度 年次大会プログラム／目次

●2023年6月17日(土) 13:00 - 18:00

13:00- 開会挨拶 赤間 亮(アート・ドキュメンテーション学会会長)
モンテ・カセム(国際教養大学 理事長・学長)

【シンポジウム 地域文化資源のドキュメンテーションと地域連携・国際発信】 13:10 - 15:30 p.6

13:10- [趣旨説明] ファシリテーター:赤間 亮(立命館大学アート・リサーチセンター長)

13:20- [報告 1] 熊谷 嘉隆(国際教養大学 副学長)
秋田民俗芸能アーカイブス構築における問題意識と可能性

13:40- [報告 2] 西村 修(秋田ケーブルテレビ)
地域文化資源の可能性と課題—油谷氏コレクションを題材に—

14:00- [報告 3] 長瀬 一男(わらび座 Digital Art Factory)
秋田を拠点にして 70 年を迎える
劇団わらび座のアーカイブ活動と活用事例

14:20-14:30 休憩

14:30-15:30 パネルディスカッション・質疑応答
ディスカッサント:千葉 加恵子(国際教養大学 准教授)

【活動紹介】 15:35 - 15:55 p.8

[活動紹介1] 堀井 洋(合同会社 AMANE)
多様な担い手たちによる地域資料継承に関する事例紹介

[活動紹介2] 鷲田 めるろ(十和田市現代美術館／東京藝術大学)
十和田市現代美術館と青森 5 館連携

【第 17 回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・奨励賞授賞式】 16:10 - 17:00 p.9

【国際教養大学 中嶋記念図書館 自由見学】 17:00 - 18:00 p.10

17:00-17:10 図書館説明(オンライン配信あり)

17:10-18:00 図書館自由見学(オンライン配信なし)

●2023年6月18日(日) 10:00 - 16:00

【学会総会】 10:00 -12:00 (会員限定) *オンライン参加のみ、現地ではWi-Fi利用可

【研究発表会】 13:00 -14:30 (発表25分 質疑5分)

- | | | |
|-------------|---|------|
| 13:00-13:30 | [発表1] 大坪 逸貴(サイフォン合同会社)
大橋 正司(サイフォン合同会社)
飯塚 重善(サイフォン合同会社/神奈川大学)
人間中心設計の考え方を取り入れたデジタルアーカイブデザイン | p.12 |
| 13:30-14:00 | [発表2] 寺師 太郎(凸版印刷株式会社)
高德院 観月堂における色彩計測の結果 | p.14 |
| 14:00-14:30 | [発表3] 金子 貴昭(京都先端科学大学)
樋口 摩彌(同志社大学社会学部)
出版記録のデジタルアーカイブとその効用——村上勘兵衛文書を事例として | p.16 |

【ポスターセッション(ライトニングトーク)】 14:30 -14:45

- | | | |
|--|--|------|
| | [発表1] 田村 剛(NPO 法人アーツセンターあきた)
三富 章恵(NPO 法人アーツセンターあきた)
高橋 ともみ(NPO 法人アーツセンターあきた)
プロセスの記録と発信—アーツセンターあきたの実践から— | p.18 |
| | [発表2] 矢部 恵子(京都芸術大学大学院)
4つの雅号をもつ画家・平沢貞通の生涯 | p.18 |
| | [発表3] 学会アーカイブ SIG(アート・ドキュメンテーション学会)
JADS Archives and Archival Methods SIG(学会アーカイブ SIG)の活動
—— 2022年度 | p.19 |

【動向紹介】 15:00 -15:50

- | | | |
|-------------|--|------|
| 15:00-15:25 | [動向紹介1] 中尾 智行(文化庁博物館振興室 博物館支援調査官)
博物館のデジタル化:課題と展望 | p.20 |
| 15:25-15:50 | [動向紹介2] 川口 雅子(国立アトリサーチセンター
情報資源グループリーダー)
国立アトリサーチセンター情報資源グループの活動概要 | p.20 |
| 15:50-16:00 | 閉会挨拶 本間 友(アート・ドキュメンテーション学会 幹事長) | |

第16回 秋季研究集会 発表者募集	p.21
『アート・ドキュメンテーション研究』第32号 原稿募集	p.22
アート・ドキュメンテーション学会 刊行物販売のおしらせ	p.23
アート・ドキュメンテーション学会 入会のご案内	p.24

シンポジウム 「地域文化資源のドキュメンテーションと地域連携・国際発信」 6月17日（土）13：10 - 15：30

ここ数年、本学会では「アート」が含む概念の拡大や、デジタル時代におけるドキュメンテーションの意味や手法の変化について注視してきた。今年度4月1日からは、新たにバージョンアップした博物館法が施行された。そこでは、デジタル・アーカイブの作成と公開についての明確な位置付けとともに、“地方”の学校、公共・個人団体との連携、“地域”の文化観光・文化振興や地域の活力向上が強調されている。

今回、秋田での初めての年次大会開催にあたり、“地方・地域”というキーワードのもと、博物館が従来あまり対象としてこなかった「地域に集積した”人々の営み”としての文化資源」を、拡大する「アート」の一つとして捉え、博物館が主体的に行う地域連携、地域活性化、さらには国際発信まで見据えた有効なターゲットと考える。その場合、これらをどのようにドキュメンテーションし、どのように活用していくべきなのだろうか。秋田県の具体的な文化資源を素材として取り上げながら議論していく。

登壇者・ディスカッサントプロフィール(登壇順、敬称略)

赤間 亮（あかま りょう）：ファシリテーター

立命館大学文学部教授／立命館大学アート・リサーチセンター長

早稲田大学演劇博物館助手を経て、立命館大学文学部、先端総合学術研究科、文学研究科などで、現在は文化情報学のコースを担当。デジタル・ヒューマニティーズ研究を、アート・リサーチセンターを拠点に推進するとともに、海外に散在する浮世絵や古典籍を中心とした日本の文化資源デジタル・アーカイブが主要な研究テーマで、現在はデジタル・ヒューマニティーズの先にある日本型パブリック・ヒューマニティーズの進展を目指して活動中である。

共編著に『イメージデータベースと日本文化研究』（2010）、「文化情報学ガイドブック」（2014）、『文化情報学事典』（2019）など。

熊谷 嘉隆（くまがい よしたか）

国際教養大学理事兼副学長

オレゴン州立大学森林学部森林資源学科博士課程修了後、ワシントン州立大学農学家政学部自然資源科学科博士研究員を経て2004年に国際教養大学助教授として着任。同学国際連携部長、アジア地域研究連携機構長、国際教養教育推進機構長を歴任し2019年8月より現職。専門は自然保護地域政策論、持続可能なコミュニティ構築。国際自然保護連合世界保護地域委員会副委員長東アジア地域担当。

西村 修 (にしむら おさむ)

秋田ケーブルテレビ・レポーター、コメンテーター

秋田魁新報社・報道記者を経て、秋田ケーブルテレビ・レポーターとしてドキュメンタリー番組を取材・制作。「アップルは届かず～日本最後の空襲はなぜ決行されたか？」(2020 地方の時代映像祭優秀賞)、「戦場の秋田美人～戦地に赴いた芸者部隊と忘れられた恤兵(じゅっぺい)」(2022 日本ケーブル大賞番組アワード優秀賞、2023 しばれるアワードグランプリ)など。最新作は稀代の収集家・油谷満夫氏の生き方を追った「『物』の声を聴け ～65年、ただひたすら集めて」(2023.5.31 放送)。

共編著に『伝えたい記憶』(2006)、『戦場のスケッチ』(1995)など。

長瀬 一男 (ながせ かずお)

わらび座 Digital Art Factory

1953年、秋田県湯沢市生まれ現在 70 歳。北海道大学工学部応用物理学科を中退し、劇団わらび座に入団。全国公演の営業や、あきた芸術村での修学旅行のコーディネーターを務め、1984年からコンピュータを活用した業務に携わる。1997年秋田県の支援で県内初の地域インターネットプロバイダーを設立。第一回マルチメディアコンテンツ制作支援事業に応募して「モーションキャプチャーを用いた民族芸能の3次元デジタル舞踊符の制作」を1998年発表。以降、国立劇場の歌舞伎への活用や、芸能を学ぶためのDVD・20タイトル制作、動作分析などに取り組む。また、1999年には江戸時代の門屋養安日記を文字データベース化、2002年には秋田の民謡1045曲の音声データベースを発表。現在は全国の42都道府県で4.5万曲のデータベース作成や、芸能映像のデータ化にも取り組む。

千葉 加恵子 (ちば かえこ) : ディスカッション

国際教養大学 国際教養学部准教授

英国での日本伝統文化、主に茶道における階層、ジェンダーの研究を経て、現在は文化人類学者の視点より日本伝統文化論、日本社会論、ジェンダー論のコースを担当。今年度は国際教養大学で構築している400以上の秋田の伝統芸能、伝統工芸、食文化などのデジタルデータを基に、県内販売事業者等と連携して、新たに外国人のニーズにマッチした英語デジタルアーカイブを構築する研究に従事。秋田地元企業と参画し、アーカイブを活用した情報提供をすることで、インバウンドビジネスモデルの開発を目指して活動中。

著書に *The Japanese Tea Ceremony - An Introduction* (2022), *Japanese Flower Culture - An Introduction* (2022), *Japanese Women, Class and Tea Ceremony* (2010) など。

【活動紹介】

6月17日(土) 15:35 - 15:55

多様な担い手たちによる 地域資料継承に関する事例紹介

合同会社 AMANE

<https://amane-project.jp>

山形アーカイブ

<https://cherry.yum-archives.net/yamagata-archive/>

産学官連携に基づいた地域資料継承支援事業

<https://coop.amane-project.jp>

日本国内には、多種多様な歴史資料・文化財が現存し、それらは重要な学術研究資源としてのみではなく、社会的な振興・発展に資する地域文化資源としても注目されている。その一方、それら地域文化資源（資料）の保存・継承に関しては、地震などの自然災害に起因する所謂“突発的な資料喪失”と併せて、急速に進む人口減少・少子高齢化や過疎化による“緩やかな資料喪失”への対応など、より現実的かつ実践的な新たな手法および体制の実装・導入が急務である。

合同会社 AMANE では、研究機関や自治体と連携した地域資料継承を目指す取り組みを実施してきた。本報告では、岩手県奥州市および山形県山形市における事例を中心に、多様な担い手たちによる地域資料継承事業の概要について紹介する。

十和田市現代美術館と青森 5 館連携

十和田市現代美術館(青森県十和田市西二番町 10-9)

<https://towadaartcenter.com/>

AOMORI GOKAN

<https://aomorigokan.com/>

2008 年に開館した十和田市現代美術館は、大規模な現代美術の常設作品と街中での展示を特徴とする美術館である。2021 年、新しい常設作品として塩田千春とレアンドロ・エルリッヒの作品を購入した。街中に目[mé]が作品として改修した展示スペースを拠点に、青柳菜摘などの展覧会を開催している。台湾を中心に約 1 割の来館者が海外からである。2020 年に弘前れんが倉庫美術館が開館、2021 年に八戸市美術館がリニューアルオープンした。青森公立大学国際芸術センター青森、青森県立美術館、十和田市現代美術館とともに県内の 5 館が連携し、2024 年度に共同企画の「アートフェス」を開催予定。

堀井 洋 (ほりい ひろし)

合同会社 AMANE 代表社員

北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科 博士後期課程修了 博士(情報科学)。文部科学省 IT プログラム研究員、北陸先端科学技術大学院大学助教を経て、2009 年に学術資料の継承・活用・情報資源化を目指し合同会社 AMANE を設立、代表社員に就任。現在に至る。専門は情報システム学、人文情報学。

鷺田 めるろ (わしだ めるろ)

十和田市現代美術館館長 / 東京藝術大学准教授

1973 年京都市生まれ。東京大学大学院修士課程修了。専門は美術史学(現代美術)、博物館学(キュレーション)。金沢 21 世紀美術館(1999-2018 年)を経て現職。第 57 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館キュレーター。あいちトリエンナーレ 2019 キュレーター。著書に『キュレーターズノート二〇〇七-二〇二〇』(美学出版)。主な論文に「アートプロジェクトの政治学」(川口幸也編『展示の政治学』)、「鶴来現代美術祭における地域と伝統」(『金沢 21 世紀美術館研究紀要』5 号)。

第17回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同奨励賞 授賞式

2023年6月17日

第17回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同奨励賞選考委員会

標記の賞では、今回より枠組を新たに学会賞と奨励賞の選考を行いました。その結果、会員の皆様より推薦いただいた候補の中から「学会賞」1件、奨励賞評価委員会からの推薦による候補者から「奨励賞」2件の授賞を決定いたしました。今後とも本賞の発展にご協力くださいますよう、お願いいたします。

第17回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同奨励賞選考委員会
委員長：高橋晴子 委員：赤間亮、嘉村哲郎、黒田結花、田良島哲、本間友

第17回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞

受賞： 鷺見 洋一 氏

『編集者デイドロ：仲間と歩く『百科全書』の森』（平凡社、2022年）の刊行に対して

授賞理由：

本書は、鷺見洋一氏の長年にわたるデイドロと『百科全書』に関する研究に基づき編まれた大著である。全九章、九百ページをもって、『百科全書』、デイドロという人間、そしてその仲間たちの姿を詳細に記述し、分類、コレクション、カタログ、編集、著作権など、ドキュメンテーションに携わる人々にとって重要なテーマを数多く含み込んでいる。

とりわけて注目すべきは、「日本人の「思想史」、「概念史」からはほぼ完全に黙殺されているに等しい『百科全書』の図版を重視する」という、著者の姿勢である。第八章「図版の世界」および第九章「身体知のなかの図版」では、著者自身の図版の解読の試みを通して、図版の研究およびドキュメンテーションの方法を明確に示し、ドキュメンテーションの世界の芳醇さを力強く伝えている。

加えて、本書の刊行の背後には、著者のデジタル・メディアを巡る実践があることも忘れてはならない。著者は、慶應義塾大学SFC研究所ならびにアート・センターなどにおいて、早期からデジタル・メディアを用いた研究に取り組んできた。なかでも、2008年から2018年までに進めたプロジェクトでは、百科全書の各項目で明示的に記されている出典情報をすべて収集し、メタデータとして整理するという膨大な作業に取り組み、国際的にも大きな評価を得た。

著者はあとがきにおいて、『百科全書』に対峙するにあたり、「方法や手段はどこまでも多様で多面的なもの」であり、また「なによりも研究者の側に、そのように多彩で混沌とした「知の集成」、超巨大な対象と向かい合ったときの、心のときめきというか、新鮮な驚きやちょっとした恐怖心のようなものがないといけない」と述べている。この言葉は、ドキュメンテーションという方法を携えて、多彩で混沌としたアートの世界に向き合い続けようとする、私たちアート・ドキュメンテーションの仲間たちを初心に返らせ、鼓舞するものである。

以上の成果を評価し、第17回野上紘子アート・ドキュメンテーション学会賞を授与する。

【学会賞の概要】

以下a)、b)、c)のいずれかに該当するものを選出する。対象は会員に限らない。

a) Museum、Library、Archivesをはじめとするアート・ドキュメンテーション関係業務の現場において、効果的かつオリジナリティを発揮した者、あるいは機関。

b) アート・ドキュメンテーション分野の振興発展に寄与した功績が認められる者、あるいは機関。

c) アート・ドキュメンテーションに関する論文・記事(学会誌『アート・ドキュメンテーション研究』、『アート・ドキュメンテーション通信』への掲載に限らない)、図書、展覧会、データベース、ウェブサイト等のなかから優れたもの。対象となる論文・記事、図書、展覧会は、受賞年の前年度を含む過去3年間に発表されたものとする。

第17回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション奨励賞

受賞： 三島 大暉 氏

研究論文「ソーシャルメディアを用いた収蔵品カテゴリの抽出とその性質」（『アート・ドキュメンテーション研究』第30号、2022年）に対して

授賞理由：

三島氏は本論文において、博物館収蔵品データベース検索の際に必要なボキャブラリーの課題を乗り越えるため、ソーシャルタギングやフォークソノミーの方法論に基づく研究を行い、その成果と課題を提示した。海外の動向への目配りを含めて論文の構成としてまとまっている点に加え、新しい研究手法に挑戦し、成果を上げている点が高く評価できる。アート・ドキュメンテーションにかかわる新たな領域の開拓について、今後の一層の活躍に期待し、奨励賞を授与する。

【奨励賞の概要】

アート・ドキュメンテーション分野の発展における将来の貢献を奨励するため、本会が主催する研究発表会、シンポジウム、セミナー、ポスターセッション、活動紹介等で発表した登壇者、および『アート・ドキュメンテーション研究』に掲載された論文・記事の著者のなかから優れたものを選出する。対象は会員に限り、受賞年の前年度に発表、刊行されたものとする。

受賞： 松崎 博子 氏

事例報告「大学図書館における発掘調査報告書整理作業と「全国遺跡報告総覧」の活用について —私設博物館寄贈の資料整理作業を事例として」(『アート・ドキュメンテーション研究』第30号、2022年) に対して

授賞理由：

松崎氏は、黒瀬知子氏との共著による本事例報告において、私設博物館旧蔵の考古関係資料の整理について、中断されていた活動を大学図書館で救い上げた実践活動を提示した。資料整理に有用なデータベースの具体的な活用事例も含め、同様なし類似する課題に直面する各機関に対し、ひとつの模範を示したものと評価できる。また、MLA連携をはじめ、文化領域に携わる各機関等の連携の推進を目的に掲げる当学会の活動にも大きく寄与する事例報告をまとめ上げたことを評価し、奨励賞を授与する。

※第18回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞の推薦募集は、『アート・ドキュメンテーション通信』および学会ウェブサイト等で告知いたします。会員のみならず、多くの推薦をお寄せくださいますようお願いいたします。

【国際教養大学 中嶋記念図書館 自由見学】
6月17日（土） 17:00 - 18:00

17:00 - 17:10 図書館説明（オンライン配信あり）
17:10 - 18:00 図書館自由見学（オンライン配信なし）

図書館の呼称「中嶋記念図書館」は、
中嶋嶺雄初代学長の本学創設・発展
への功績を称えたものです。

「24時間の開館」は、中嶋初代学長の
「いつでも勉強できる場を提供したい。」
という強い思いから実現しました。
（大学ウェブサイトより）

中嶋記念図書館の詳細はこちら
<https://web.aiu.ac.jp/library/outline/>



外観



館内

画像提供：国際教養大学

【研究発表会】

6月18日(日) 13:00 - 14:30 (発表25分 質疑5分)

発表者プロフィール

大坪 逸貴 (おおつば いつき)

サイフォン合同会社 アーキビスト、IA
武蔵野美術大学卒業。武蔵野美術大学 美術館・図書館でデジタルアーカイブのメタデータ設計、システム企画、資料登録管理等を包括的に担当。2021年よりサイフォンに在籍。アーカイブ機関の情報環境設計や、WEB サイト情報設計に取り組んでいる。近年の主な実績に「中村とうようコレクションデータベース 地球が回る音」「とうようズ・レガシー」、ジャパンスーチのコンテンツ企画・品質管理などがある。

大橋 正司 (おおはし しょうじ)

サイフォン合同会社 代表社員 IA
東京大学大学院情報学環・学際情報学府修士課程修了。BtoC サービスから業務システムまで、サービスデザインを幅広く手掛ける。近年はデジタルアーカイブ関連の情報設計にも従事。2021年より内閣官房情報通信技術 (IT) 総合戦略室を経て、民間専門人材としてデジタル庁立ち上げに従事 (現職はデザイン・プログラム・マネージャー)。サービスデザインプロセスの浸透・ガイドライン整備等を担当。

飯塚 重善 (いづか しげよし)

サイフォン合同会社 リサーチ
静岡大学卒業。日本電信電話株式会社 (NTT) を経て、2009年から神奈川大学に所属する傍ら、2022年から現職。博士 (情報学)。認定人間中心設計専門家。特定非営利活動法人 人間中心設計推進機構 (HCD-Net) 理事。専門はコミュニケーションデザイン。共著書に『SF 映画で学ぶインタフェースデザイン アイデアと想像力を鍛え上げるための141のレッスン』(丸善出版 2014) 他。電子情報通信学会 HCS 研究会賞受賞 (2021)、HCD 研究発表会 優秀講演賞受賞 (2018、2019)。

寺師 太郎 (てらし たろう)

フォトグラファー (凸版印刷株式会社勤務)
日本大学芸術学部写真学科卒業。凸版印刷入社後フォトクリエティブに配属。ポスター、カタログ、カレンダーなどの撮影を手掛け、2000年より北米先住民の岩絵の調査をグラフィックデザイナー栗津潔氏と始める。2011年より本社文化事業推進本部にて国宝重文等の文化財デジタルアーカイブ業務に従事。日本写真家協会会員。共著書に『ロックアート-神話そしてイメージーション』(フィルムアート社 2002)。越後妻有トリエンナーレ参加 (2003)。第56回全国カレンダー展文部科学大臣賞 (2005)。第57回全国カレンダー展国立印刷局理事長賞 (2006)。第37回 Japan POP Festival 金賞 (2008)。第60回全国カレンダー展中小企業団体中央会長賞 (2008)。第62回全国カレンダー展審査員特別賞 (2010)。第63回全国カレンダー展経済産業省情報政策局長賞 (2011)、第67回全国カレンダー展 銀賞 (2015)。

金子 貴昭 (かねこ たかあき)

京都先端科学大学人文学部歴史文化学科・准教授
立命館大学大学院文学研究科人文専攻日本文学専修博士課程後期課程修了。博士 (文学)。日本学術振興会特別研究員、立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員、同准教授を経て2023年度より現職。専門は近世出版史。とりわけ板木を基礎資料とする板本書誌学および近世出版研究を研究テーマとし、板木デジタルアーカイブの構築・公開に取り組んでいる。主な著作に『近世出版の板木研究』(法蔵館、2013)。第35回日本出版学会賞奨励賞 (2014)、第9回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞 (2015) を受賞。

樋口 摩彌 (ひぐち まや)

同志社大学嘱託講師
同志社大学大学院社会学研究科メディア学専攻博士後期課程修了。博士 (メディア学)。日本学術振興会特別研究員などを経て現職。専門はメディア史、京都近代史。京都における新聞の誕生史を、様々な古文書や昔の新聞に基づき、研究している。主な論文に「地方の新聞史料—個人コレクションの可能性に注目して」(メディア史研究、45、2019)、「明治前期の京都新聞史(下)活版印刷所から新聞社へ」(メディア史研究、38、2015)、「明治前期の京都新聞史(上)木版印刷から活版印刷へ」(メディア史研究、37、2015)、「明治初年における「新聞」受容の風景—『京都府布令書』を手がかりに—」(メディア史研究、36、2014) など。

人間中心設計の考え方を取り入れたデジタルアーカイブデザイン

Digital Archive Design incorporating the Concept of Human Centered Design

大坪 逸貴*、大橋 正司*、飯塚 重善*

OTSUBO Itsuki, OHASHI Shoji, IIZUKA Shigeyoshi

Resume:

筆者らは地域アーカイブの分野で、優れた UX を実現するデジタルアーカイブ設計の要件定義に有用な情報の導出を目指し、自治体職員と地域住民を対象に、人間中心設計の考え方（参加型デザインの手法）を取り入れたワークショップを実施した。その結果からニーズを分析したところ、デジタルアーカイブの構成要素として、コミュニティの文化継承のしくみをデザインすることの必要性が確認された。

1. はじめに

近年計画される複合施設型図書館では、自治体やアーカイブ機関が保有する文化資源情報に加えて、地域の人・もの・ことに関する情報も収集し、提供することが求められている。そのため、地域住民との共創により記録した情報をアーカイブし、次の世代に継承できるという要件を満たすデジタルアーカイブの開発・構築が必要となる。

デジタルアーカイブはその特性上、利用者が多岐に渡ることから、提供すべき機能を明確に定めることが難しいながらも、使いやすく魅力あるサービスとして「新たに創出する」ことが求められる¹。しかし、そうしたデジタルアーカイブを設計するアプローチは手探り状態にある。

そこで筆者らは、常にユーザーの視点を忘れないこと、すなわち人間中心設計（HCD：Human Centered Design）²の考え方を採り入れることとした。特定の組織や機関がデザインするのではなく、ユーザーとなる地域住民等とも協働して構築するプロセス、すなわち、参加型デザイン（participatory design）³によるデザイン活動によって、「楽しい」「面白い」といった利用を繰り返したくなるような利用者の感性的な評価を高める、サービスの総合的なユーザー体験（User Experience：UX）の設計が実現できると考えた。

本稿では、その取り組みとして、高知県の佐川町新文化拠点（仮称）⁴の事例を紹介する。

2. 佐川町での取り組み

2.1 プロジェクトについて

高知県佐川町では、図書館のリニューアルにおいて「実空間と情報空間の融合」をコンセプトに、物理的な図書資料に加えてデジタルの情報、町内外の多様な情報源へのアクセスのデザインを検討している。これは、図書館の概念を「本を借りる場所」から「知的好奇心を満たすことができる複合施設」に転換することを目指すものである。

2.2 実施内容

デジタルアーカイブの利用者は①運営利用者と②一般利用者に大別できる。本計画において①は自治体職員、②は地域住民が主に想定される⁵。筆者らはこの両者を対象としたワークショップを2023年1月～3月の間に2回に渡り、地域学習コーディネーターの大道剛氏との共同運営で実施した。（主催：佐川町教育委員会、協力：国立国会図書館）以下、概要を示す。

1) ワークショップ 1 回目

2023年1月23日に、佐川町立佐川地質館を会場とし、自治体職員と図書館関係者を対象に「佐川町の地域資料をデジタルアーカイブする」と題して以下の内容で開催した。

- ・デジタルアーカイブの基礎知識レクチャー
- ・ジャパンサーチ⁶の連携事例とプロジェクト機能を使ったメタデータ登録演習（講師：奥村牧人）
- ・資料の俯瞰撮影セットの設置、説明
- ・地質館の資料デジタル化状況の共有
- ・ディスカッション

2) ワークショップ 2 回目

*おおつぼ いつき、*おおはし しょうじ、*いづか しげよし（サイフォン合同会社）。

2023年3月12日に、佐川町総合文化センターを会場とし、自治体関係者および地域住民を対象に「地域のデジタルアーカイブって何？-新図書館に向けてのワークショップ」と題して、以下の内容で開催した。

- ・地域アーカイブへの理解を深めるレクチャー（講師：福島幸宏氏）
- ・地域アーカイブを使ってみるワーク
- ・ジャパンサーチのワークスペースを使ったキュレーションワーク（講師：眞籠聖氏）
- ・佐川町で作るデジタルアーカイブのアイディエーションワーク

2.3 結果

2回目のアイディエーションワークで得られた結果を基に、KJ法⁷を用いて参加者ニーズを分析したところ、「システムに関するニーズ」「コンテンツに関するニーズ」に二分された（ここでは、小分類化した項目名のみ記す）。

1) システムに関するニーズ

- ・基本的な仕様
- ・情報探索のインターフェース設計
- ・利活用を促すための工夫
- ・関連情報の見せ方

2) コンテンツに関するニーズ

- ・コレクションポリシーの策定
- ・仮想空間でのデータ表現
- ・時間の複数性の表現
- ・現代の記録保存
- ・市民参加型プロジェクト

2.4 考察

とりわけコンテンツに関するニーズに注目して考察したところ、以下の知見が得られた。

- ・過去を追体験するしくみが求められる。地域における時間の複数性を体験可能な形で表現す

- ることで、歴史とのつながりを感じられること
- ・現在の日常的な人・もの・ことの記録保存への関心度が高い。個人史をコミュニティの歴史に接続するしくみを作る
- ・デジタルアーカイブをベースに、アーカイブ機関が管理していない文化資源情報を収集するコミュニティのしくみが必要である
- ・デジタルアーカイブは地域住民が文化の記録保存活動をおこなうことを目的として活用できる

3. おわりに

筆者らは、運営利用者・一般利用者双方にとって優れたUXとなるデジタルアーカイブをデザインすることを目指して人間中心設計のアプローチを採り入れている。こうした参加型の取り組みにより、一人ひとりがユーザーであると同時に作り手でもあるという意識を持てるようにすることで、アーカイブ構築と利活用の循環を生むことが可能になると考えられる。また、住民がボトムアップで関与することでコミュニティが活性化するほか、コンテンツにさまざまな情報が付加され、新たな価値が生まれる側面もある。そして、利用者ニーズを汲み取ることで利活用されやすくなり、地域資料の価値とアーカイブの意義が再考され、長期的な運用や新たなコンテンツの整備につながることも期待される。これは、デジタルアーカイブの構成要素として、コミュニティにおける文化継承のしくみの総体をデザインすることと換言できる。すなわち、デザインの対象となるのは「時を超えたコミュニケーションのためのインターフェース」である。

今後も、本稿における取り組みを他の地域でも実施し、地域のデジタルアーカイブのデザインに役立てていきたいと考えている。

¹ 大橋正司・五十嵐佳奈「デジタルアーカイブをデザインする：「まだそこにはいない」利用者に共感し本当に使われるサービスを作るために」、『デジタルアーカイブ学会誌』第3巻第2号（2019年3月）、pp.213-216.

² 山崎和彦、他『人間中心設計入門 HCD ライブラリー 第0巻』、近代科学社、2016年。

³ P. Ehn, Scandinavian design : On participation and skill, Participatory Design : Principles and Practices (D. Schiller and A. Namioka, eds.), L. Erlbaum Associates, pp.41-77, 1993.

⁴ 筆者らはアドバイザーとして関与。本研究を分析レポートとし、設計JVへの提言をおこなった。

⁵ 自治体職員は地域住民でもあり、一般の地域住民には郷土資料の編纂者等のコンテンツメーカーが含まれるため、①と②は利用の文脈により区別される。

⁶ ジャパンサーチ、<https://jpsearch.go.jp/>, (Accessed 2023-05-10) .

⁷ 川喜多二郎『続・発想法』、中央公論新社、1970年。

高德院 観月堂における色彩計測の結果

Color Measurement of the Kangetsudo

寺師 太郎*

TERASHI, Taro

Resume:

近年の気候の影響による強風被害などの影響で経年劣化が進む古建築の「色」を、将来の修復や研究に資するためには、どのような記録を残すことが必要なのか。記録手法、記録環境、記録機器とその後の活用の可能性について、高德院 観月堂における色彩計測を例にして考える。

1. はじめに

本稿は令和2年3月12日～4月3日に高德院 観月堂におけるデジタルアーカイブ事業で実施された観月堂内外の色彩計測について記述する。また計測結果データを活用した来歴分析や、彩色技法等については専門家に委ねたい。よって本稿では、画像表現における真正性担保を目的として取られたデータの活用について述べるに留まっていることをお断りしておく。

さて、色彩の記録を行う上で最も簡単かつ伝わりやすい手法は、人が直接「眼」で確認できる写真撮影であろう。PCモニターやタブレット画面などパーソナルデバイスで画像を確認するのが当たり前になった事で、正確な色の担保が問題化した。なぜなら、写真による色彩の確認は人の「眼」に情報を届けるため、デバイスや観察環境によって印象が大きく変わることもあるからだ。量販店で展示されているテレビはどれも色が違うことを見れば理解に難くないと思う。色彩を正確にデジタルデータとして記録しても、写真による再現だけでは「印象」に影響する要素ばかりが多くなってしまふ。これらの問題点を解決する一つの手段として、本アーカイブ作業においては、色のレファレンスとして彩色を分光情報として記録することにした。

2. 色彩の定量化

古くから色彩の記録を定量的に行う方法は数多くあり、東京国立博物館蔵『大坂冬の陣図屏風(模本)』には文字で着彩の指示が書き込まれ、「シロ」「タン」といった指示がある。これによって模本が作られる際に元絵の色が記録されている。

印刷技術の進歩や写真製版の実現などの工業化が進み、彩色に呼応するカラーガイド¹によって近似色を目視で確認してガイドを印刷する際のデータを基に数値化することができるようになる。携帯型非接触の分光放射輝度計が開発され、条件さえ整えれば場所の制約なく様々な対象物の反射・放射両方の色彩情報を記録することが可能になった。

計測はコニカミノルタ製分光放射輝度計CS2000²を使用して計測を行った。CS2000は光を捉えるセンサー部だけでなく光を集光するレンズ部を備えることで離れたところにある対象物の色彩を計測することができる。

3. 色彩計測における問題点

文化財などサンプルの採取や接触が難しい対象は、離れた位置からの計測が前提となる。その場合どこを計測したのかの確認は目視による確認と計測結果の数値を確認して齟齬がないか対応させる必要がある。今回の計測では確認の簡便性に配慮し、目視画像のキャプチャーと計測対象を矢印で指示した写真(図1)を作成した。



図1 左：矢印画像、右：目視画像のキャプチャー

また、反射による色彩計測は使用する光源の影響を受けやすい、理想的な分光特性を持った光源の使用が前提である。人の可視領域に適合した光源としては人口太陽光照明の使用が理想的だが、

*てらし たろう (凸版印刷株式会社 日本写真家協会会員)

放射される熱量が多く作品保護を考慮すると文化財への使用が難しい。今回の計測では、熱放射が少ないキノフロ社の蛍光灯照明 4ft³を使用し外光の影響がない夜間に作業を行った。

4. 計測データ分析における問題

反射による色彩計測のデータを活用するうえでは、正確性のため光源特性を考慮する必要がある。近年演色性の良いLEDが展示現場でも採用されるなど人の目に違和感のない光源が増えてきている。しかし、人の目には感じなくとも分光特性のバランスが良くないと条件等色⁴により思わぬ方向に色が振れて見えることもある。そこで正確性の担保のため光源自体の特性の取得を白色の紙を用いて行い、光源中に含まれるスパイク部分の影響を除去できるように配慮した。

5. 色彩計測の実際

今回のアーカイブに際しては観月堂内外の特徴的な彩色の現状を記録すべく、22 点の計測ポイントで計測範囲を変えながらデータのブレがないよう 10 回計測し平均化した。

6. 計測結果の比較

目視による彩色の差異が明らかな部分について、南面内部壁面と屋根部を繋ぐ梁の終端部に着目した。韓国での「丹青」彩色を見ると朱色には3色のバリエーションがみられるが、観月堂の梁の部分にも配色順は違うが朱色を塗り分けているのではないかとと思われる部分図 2 に示すポイントの朱色分を計測しデータを取得した。



図 2 観月堂南面内部壁梁終端部

目視でも、計測値でも明確に色の違いが見られたことから、当初もしくは補色のいずれかは不明だが違う彩色が行われた可能性がある。

報告書では画像に呼応した分光データの数値に加えて分光曲線を添付することで彩色の違いを認識しやすい形で示した。

7. まとめ

今回の色彩計測は、写真撮影の色再現精度向上と観察環境の違いによって印象の変化に対応すべく行ったが、定常光を使用したことで目視でも彩色の違いを確認することができた。現在の彩色が経年による変化でグラデーションが生じているのか、計測結果が示すように当初から違う色で彩色されていたかは材料分析や類例（同年代の類似建築）の調査の参照が必要かと考えるため他の調査研究に期待したい。

今後は今回の分光データを基にデジタル色再現を試み、再現時期の特定の問題はあるが往時の彩色再現を別途取得した 3D データを活用して試みるのが期待される。まとめとして記すには不足かもしれないが、分光データを基にした簡易シミュレーションの結果を図 3 に示す。

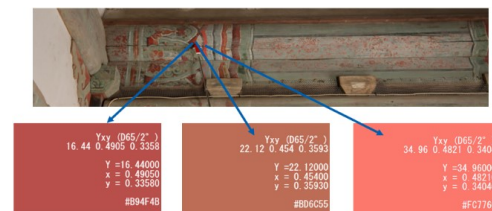


図 3 EasyRGB を活用した色再現

本稿時点での再現は Web 上で提供されている EasyRGB⁵のサービスを利用した。光源情報なども加味した正確な再現が実現すれば、文献資料など古建築の彩色に関する研究と比較することで観月堂における彩色の経緯を知る一助になるのではないかと考える。

¹ https://www.dic-graphics.co.jp/products/cguide/dic_color_guide.html , (Accessed 2023-05-08) .

² <https://www.konicaminolta.jp/instruments/products/light/cs2000/index.html> , (Accessed 2023-05-08) .

³ <https://shop.kinoflo.com/4bank/r-cfx-4804> , (Accessed 2023-05-08) .

⁴ 池田光男『色彩工学の基礎』朝倉書店、1980年、pp.22-23.

⁵ <https://www.easyrgb.com/en/match.php#inputFORM> , (Accessed 2023-05-08) .

出版記録のデジタルアーカイブとその効用 ——村上勘兵衛文書を事例として

The Utility of Digital Archives of Publication Records:
A Case Study of the Murakami Kanbei Documents

金子 貴昭*、樋口 摩彌**

KANEKO Takaaki, HIGUCHI Maya

Resume:

発表者らは、元和年間（1615～1623）に京都で創業し、近世から明治にかけて出版界の重鎮であった板元・村上勘兵衛家の出版記録の現存を確認し、通時的な出版資料として位置づけるべく、そのデジタルアーカイブ構築に着手している。本発表では、発表者らの現在の取り組みの状況・課題を報告する。

1. はじめに

日本の出版史においては、江戸時代以来、板木を所有することが板株（版權）を所有することを意味していた。そのシステムは、新刊書については明治8年（1875）の出版条例改正まで継続した。したがって、およそ江戸時代から明治初期に至るまで、あらゆるシーンで板木を基軸とした出版システムが運用されていたことになる。その運用方法は、本屋仲間による記録や、個々の板元が残した出版記録から明らかにすることができる。しかし、現存する出版関係資料の豊富さは、1. 板本（出版物）、2. 板木（版）、3. 出版記録の順であり、特に3の出版記録のうち、個々の板元による出版記録の現存量は極めて脆弱といわざるを得ず、機会を捉えて保存と共有に努める必要がある。

2. 村上勘兵衛とその出版記録

上述の状況にあって、近年、京都の板元・村上勘兵衛家が残した出版記録「村上勘兵衛文書」（以下、村上家文書）の現存を確認することができた。村上勘兵衛は、商業出版の草創期である元和年間（1615～1623）に、京都において創業し、日蓮宗書を中心に出版活動を行った板元である。明治には『太政官日誌』発行を政府から引き受けた他、京都書籍商組合につながる第一書籍商社の肝煎を務め、さらには新聞印刷にも事業を展開した。村上家文書は新出資料ではなく、近世出版研究のバイブルである蒔田稻城『京阪書籍商史』¹に村上家文書からの引用がすでに見られる他、当時の当主であった村上盛信の談話も掲載されている。

冠賢一氏『近世日蓮宗出版史研究』²も、当時「東京村上家」にあった村上家文書を利用し、日蓮宗書出版における板元・村上勘兵衛の位置づけを考察し、その研究に伴って作成されたと考えられる立正大学日蓮教学研究所編「村上家文書目録」³（以下、「目録」）も存在する。現在、その村上家文書は、京都において個人所蔵に帰している。

3. 村上家文書とその効用

前章に紹介したとおり、村上勘兵衛は近世から明治の時代転換期を通じて、出版界・印刷界に重要な位置を占め続けた重鎮である。したがって、近世から近代に至る通時的な出版研究資料として、村上家文書が極めて重要な資料となることは間違いない。その重要性に着目し、発表者らは村上家文書のデジタルアーカイブ構築に着手している。

「目録」の分類によって村上家文書を概観すれば、書冊では村上家家譜・什物帳、開板・目録、出版関係御用帳簿、日記、書籍、書状では村上家関係、板木譲渡、蔵版支配、開板、添状、板賃約定、本屋板行定、金子証文、奉公人請状、書状、家屋敷譲状、その他、のように、村上家に関わる記録、板元としての活動、仲間に関する資料など、出版活動に関わる資料が幅広く収録されており、これらの記録から、個別の出版事情、出版界の慣習、板元の経営環境をうかがい知ることのできる、出版研究の好資料といえよう。

個々の文書や書冊に目を向ければ、注目すべき資料の一つに『板行書林目録』（2冊）がある。本

*かねこ たかあき（京都先端科学大学）、**ひぐち まや（同志社大学）

書は、専用の用箋を用いて、京都で出版された書を神書・歌書・儒書・仏書・雑書などの部立に分けて列挙し、各書が単独出版であるのか、共同出版（相合板）であるのかを示して板元名を記載している。近世期の出版書目については、大坂では『開板御願書扣』⁴、江戸では『割印帳』⁵のように、本屋仲間による資料によって、本屋による出版書の全体像を把握することができるが、京都の仲間記録にはそれに相当する資料の現存が確認されていない。本書は仲間によって蓄積されてきた目録ではなく、第一書籍商社設立の準備段階に編まれたものではないかと考えられるが、仲間による記録に準ずるものとして、仲間記録の不足を補う重要な資料になると考えられる。

4. 村上家文書デジタルアーカイブ構築の問題点

村上家文書のデジタルアーカイブを構築していく上では、先に触れた「目録」が基本となる。「目録」は、各文書に通し番号を付した上で、内容の種別ごとに文書を分類し、文書の内容・差出人・作成者・受取人・形状と数を示し、通し番号とは別に編年順の番号を付与して文書を整列している。内容は比較的詳細に示され、正確性も高く、今回の構築に際しても極めて有用である。しかし、文書原本には通し番号が併記されつつも、「目録」の配列にしたがって保管されており、原秩序（原配列）は保たれていないといえる。

例えば、著作権意識の萌芽期を示す「四軒仲間」に関する板木譲渡文書（通番 44）は、関連する訴訟の着落を示す文書（通番 45）と手継ぎになっている。その発端となった訴訟文書（通番 42）も存在し、通番の近さから、この 3 点は原秩序では非常に近い位置にあったことが窺える。しかし、「目録」の分類の結果、「目録」上は 42 と 45 が村上家関係文書として、44 は板木譲渡の文書として別に掲載され、原本は、42 が村上家関係文書とし

て、手継ぎの 44～45 は板株売買文書として保管される結果となっている。継ぎ合わせがあるため致し方ないとはいえ、原秩序から離れた上に 45 の文書は分類とは異なる保管状態となっている。

また、板木譲渡に関わる文書が継ぎ合わされたものに通番 253～321 があるが、一緒に保管されている十数点の文書（これらは 253～321 とは継ぎ合わされていない）が「目録」に掲載されず、したがって通番を持たない。また、通番 395～398 は継ぎ合わされた文書であるが、各通番の間に継ぎ合わされている焼株売買や蔵板支配に関わる文書が「目録」に掲載されず、通番を持たない。後者の例では紙が継ぎ合わされているため、目録不掲載ながら原配列を保っていると考えられるが、前者の例ではその位置に置いて良いか否か、慎重な検討が必要である。

この他、一連の複数文書が目録上 1 通として略される事例や、合綴本の細目が採られていない事例があるなど、村上家文書の全容を示すには、あと数段の作業を必要とする状況である。

5. おわりに

本発表では、出版研究の重要資料となる村上家文書の現存確認とそのデジタルアーカイブ構築着手について報告し、現在直面している問題について述べた。通し番号に従えば原秩序に近い形に復元できる可能性はあるが、「目録」に採録されていない文書がある以上、それらをいかに位置づけるかという課題が出てくる。

着手段階における報告のため、問題提起としてもいささか不十分であるが、全点のデジタル化を最優先に進めつつ、今後進むべき方向についてご指導を賜れば幸いである。

本発表は科研費 22K00354 による研究成果の一部である。

¹ 蒔田稲城『京阪書籍商史』（高尾彦四郎書店、1929）、初出は『日本出版大観』上巻（出版タイムス社、1928）

² 冠賢一『近世日蓮宗出版史研究』（平楽寺書店、1983）

³ 立正大学日蓮教学研究所編『村上家文書目録』（1975）

⁴ 大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』第 16～18 巻（大阪府立中之島図書館、1991～1993）所収、大阪図書出版業組合編『享保以後大阪出版書籍目録』（大阪図書出版業組合、1936）に翻刻

⁵ 『江戸本屋出版記録』（書誌書目シリーズ 10、ゆまに書房、1980～1982）所収、朝倉晴彦・大和博幸編『新訂版 享保以後江戸出版書目』（臨川書店、1993）に翻刻

【ポスターセッション】

6月18日(日) 14:30 - 14:45

プロセスの記録と発信 —アーツセンターあきたの実践から—

田村剛・三富章恵・高橋ともみ
(NPO 法人アーツセンターあきた)

NPO 法人アーツセンターあきたは、2018 年の設立以来、秋田公立美術大学（以下、「美大」という）を基軸としながら、美大と地域との産官学連携のハブとして、アートやデザイン、まちづくりに関わるさまざまなプロジェクトに取り組んでいる。また、2021年3月からは、秋田市が旧県立美術館をリノベーションして設置した公共文化施設である秋田市文化創造館の指定管理にも従事している。

法人事業の中軸を担う、美大の社会連携事業や秋田市文化創造館の指定管理事業においては、これまでウェブや印刷物などを用いて多様なプロジェクトのプロセスやアウトプットのアーカイブ（記録と発信）に注力してきた。この背景には、物理的、また時に心理的にプロジェクトに直接アクセスできる人が少ない地方都市の状況を踏まえ、オンラインや印刷物で記録を残し公開することにより、距離や時間軸を超えて活用される可能性を残すことを重要視する考え方がある。

本発表では、これまでのアーツセンターあきたによる多様なアーカイブの実践例を紹介するとともに、その成果や課題を報告する。

田村 剛 (たむら つよし)

NPO 法人アーツセンターあきた コーディネーター
農機工機メーカーにて勤務後、大学進学。個人の風景体験と社会的な風景認識について研究。修士（社会学、立命館大学）。秋田公立美術大学開学時に助手として赴任。地域住民と学生とのコミュニティづくりを行った。現職では秋田公立美術大学の地域連携事業を担当。

三富章恵 (みとみゆきえ)

NPO 法人アーツセンターあきた 事務局長
名古屋大学大学院国際開発研究科修了。2006 年より、独立行政法人国際交流基金に勤務し、東京およびマニラ（フィリピン）において青少年交流や芸術文化交流、日本語教育の普及事業等に従事。一般財団法人教育支援グローバル基金での勤務を経て、2018 年 4 月より現職。

高橋ともみ (たかはしともみ)

NPO 法人アーツセンターあきた コーディネーター／ライター
日本美術史を学び、博物館・新聞社・制作会社等に勤務後、フリーランス。取材・編集・執筆をしながら秋田でのんびり暮らす。2016 年秋田県立美術館学芸員、2018 年からアーツセンターあきたで秋田公立美術大学関連の展覧会企画、編集・広報等を担当。

4 つの雅号をもつ画家・平沢貞通の生涯

矢部恵子
(京都芸術大学大学院)

筆者は、京都芸術大学 2022 年度研究・制作・発表助成制度を得て、「平沢貞通生誕 130 年・没後 35 年記念絵画展 —『不朽』『三味二』『大暲』『光彩』— 画家・平沢貞通の生涯—」（会期/2022 年 11 月 22 日～12 月 3 日、会場/ギャラリーTEN、東京都台東区谷中）を開催した。

タイトルに示すように平沢貞通は生前、『不朽(ふきゅう)』『三味二(さみじ)』『大暲(たいしょう)』『光彩(こうさい)』と、4 回雅号を変えた。殊に『光彩』は、獄中期の雅号でパブリックコレクションにおける『光彩』時代の研究実績は皆無である。

筆者は萌芽期から獄中期に至る全ての雅号が一堂に介する展示をめざした。同展は捜査の名目で押収された多くの作品を画家の没後も、大事に保管してくれた所蔵者のコレクションから成る開催となった。また、会期中にはデジタルアーカイブサロン番外編で「ギャラリートーク」を行った。サロンを運営する諸氏の全面的な協力のもと、会場とオンラインのハイブリッドで行い、有意義な場となった。

散逸する作品と忘却される画家の存在をどうアーカイヴするのか。課題は山積みだが、明るい兆しも見える。持論を呈し、併せて皆様より忌憚のないご意見を頂きたい。

矢部 恵子 (やべ けいこ)

京都芸術大学大学院芸術研究科芸術専攻博士後期課程。
帝展無鑑査の座から一転して死刑囚に処された画家・平沢貞通の再評価をめざし、2014 年より研究を開始。京都芸術大学 2022 年度研究・制作・発表助成制度を得て、「平沢貞通生誕 130 年・没後 35 年記念絵画展 —『不朽』『三味二』『大暲』『光彩』— 画家・平沢貞通の生涯—」を開催。2023 年 2 月、同展記録集発刊。

JADS Archives and Archival Methods SIG (学会アーカイブ SIG) の活動 — 2022 年度

学会アーカイブ SIG

(アート・ドキュメンテーション学会)

2022年度も月1回のペースで勉強会もしくは会合を開催してきました。会合においては、「学会アーカイブ」の設立に向けて必要と考えられる課題の抽出や検討をおこなってきました。その中で、学会活動を通じて生まれてきた資料群を整理（評価・選別）するために必要な補助情報の存在が浮かび上がってきました。その一つが、「JADS の活動年表」です。学会 20 周年を迎えた際に作成された年表を底本として、当 SIG 会合時に参加者で整理しました。それに併せて、刊行物一覧や研究会一覧なども整備編集しています。

そして、もう一つ、学会アーカイブの領域を示すような「見取り図」を作成しました。「学会アーカイブ」に含まれる資料はどのようなものか、どのような活動をアーカイブとして残すべきかなど、一言では言い表せない「学会アーカイブ」を見渡せることを目標に試作しているものです。

本ポスターセッションでは、それら作業過程の一部を SIG の活動記録と共にご紹介します。

JADS Archives and Archival Methods SIG (学会アーカイブ SIG)

ひと月に一回のペースで、アート・ドキュメンテーション学会における学会アーカイブの在り方等を検討する「会合（参加は JADS 会員限定）」と、広く学協会のアーカイブ等をテーマとして学ぶ「勉強会」を開催しています。JADS 会員に限らず、どなたでも参加可能な勉強会の開催記録や予定は、SIG のウェブサイトをご覧ください。
<https://sites.google.com/view/jads-aam-sig/>

【動向紹介】

6月18日(日) 15:00 - 15:50

博物館のデジタル化：課題と展望

中尾智行

(文化庁博物館振興室 博物館支援調査官)

インターネットが主要な情報資源となってきた現在、博物館資料のデジタル化や展示や学習コンテンツ等のデジタル対応が求められている。資料のデジタル化は資料管理などの業務 DX の観点からも重要なだけでなく、社会的にとっても創造的活動の源泉として広く活用できる基盤となる。2023 年 4 月に施行された改正博物館法においては、資料の電磁的記録の作成と公開が博物館の事業に加わることとなり、そうした取り組みへの支援も始まっている。本発表では博物館資料のデジタル化に関する現状と課題を整理しつつ、今後の展望を行いたい。

国立アトリサーチセンター

情報資源グループの活動概要

川口雅子

(国立アトリサーチセンター

情報資源グループリーダー)

国立アトリサーチセンターは、日本におけるアート振興を持続的かつ国際的に展開するための新たな推進拠点として、本年 3 月 28 日、独立行政法人国立美術館本部に設置された。「アートをつなげる、深める、広げる」をミッションに、情報収集と国内外への発信、コレクションの活用促進、人的なネットワークの構築、ラーニングの拡充、アーティスト支援などに取り組み、日本の美術館活動全体の充実に目指している。

本発表では、日本のアートやアーティスト、全国の美術館コレクションをめぐり調査研究の拠点となることを目指す情報資源グループの活動の一端を紹介する。

中尾 智行 (なかお ともゆき)

文化庁博物館振興室 博物館支援調査官

奈良大学文化財学科卒。専門は日本考古学と博物館学。河内長野市教育委員会、大阪府文化財センター、鳥取県教育文化財団、神戸女子大学非常勤講師、大阪府立弥生文化博物館総括学芸員を経て 2020 年から現職。論考に「博物館の北極星」(2021 丹青研究所)、「博物館のデジタル化：公共化と価値協創」(2022 奈良文化財研究所)等。多様な現場経験を活かしながら、博物館の持続的な発展を支援していきたい。

川口 雅子 (かわぐち まさこ)

独立行政法人国立美術館国立アトリサーチセンター情報資源グループリーダー/国立西洋美術館主任研究員財団法人ポーラ美術振興財団ポーラ美術館を経て 2022 年より現職。共編著に『松方コレクション 西洋美術全作品』全 2 巻(国立西洋美術館、2018-2019 年)、論文に「カタログ・レゾネ編纂と美術作品のドキュメンテーション」(『アート・ドキュメンテーション研究』、2020 年)等。「魅力ある新国立公文書館の展示・運営の在り方に関する検討会」構成員(2021 年～)。第 15 回西洋美術振興財団賞・学術賞受賞(2020 年)。

第16回 秋季研究集会 発表者募集

本年2023年度第16回秋季研究集会は、10月28日（土）で東京文化財研究所とオンラインでのハイブリッドでの開催をしています。

本年度も昨年に引き続き、会員以外も含めた若手研究者や新しいプロジェクトに挑戦する方々からの「萌芽研究発表」も設けます。萌芽研究では、そのテーマに関連する経験豊富な会員からの講評・助言、参加者との討議を行います。加えて、優れた発表に奨励賞を授与いたします。

つきましては、「一般研究発表」、「萌芽研究発表」を下記要領で募集いたします。

たくさんのご応募をお待ちしています。

■ 発表申込み〆切：2023年7月23日（日）
<<https://forms.gle/cB7kr7wJcKE7LGuj9>>

1) 研究発表：アート・ドキュメンテーションに関する研究・事例報告・調査報告等で、会員個人による発表、もしくは会員を代表者とするグループ発表。

◆発表時間：25分、質疑：5分。

◆応募資格：アート・ドキュメンテーション学会の正会員、学生会員、賛助会員組織にご所属の方、名誉会員。

※一般研究発表は、非会員および団体購読会員組織ご所属の方には応募資格がありません。この機会にぜひご入会をご検討ください。

2) 萌芽研究発表（*非JADS会員も応募可能）

アート・ドキュメンテーションに関する、若手研究者による自身の研究プロジェクトの発表や、現在進行中の挑戦的なプロジェクトの紹介です。日頃の研究を広く情報共有して、アドバイスを受けることを目的とします。グループ発表も可能です。

なお、事前に講評担当者を決定し、当日きめ細かな講評・助言が受けられます。

◆発表時間：10分、講評：5分、質疑：5分

◆原則以下の条件を目処とする。

- ・現在大学院在籍中、あるいは大学院課程を修了し、申込時点で専門職に就いていない方
- ・大学を卒業または大学院課程を修了し、申込時点で専門職について5年以内の方

ただし、以下上の条件を満たさない場合でも、行事・企画委員会が認めたものは発表可能とする場合があります。

※これを機会に、ぜひご入会をご検討ください。

■秋季研究集会日時：2023年10月28日（土）

場所：ハイブリッド

東京文化財研究所 & オンライン（予定）

（東京都台東区上野公園 13-43）

午前

- ・東京文化財研究所 資料閲覧室見学（※15名限定）

午後

- ・秋季研究集会（セミナー室）（※オンサイトは70名限定）
 - 萌芽研究発表
 - 研究発表

『アート・ドキュメンテーション研究』第32号

原稿募集

『アート・ドキュメンテーション研究』編集委員会では、第32号（2024年5月刊行予定）に掲載する原稿を募集しています。

研究論文は査読対象となりますが、その他に研究ノート、事例報告、資料紹介、書評なども歓迎いたします。詳しくはJADSウェブサイトの投稿規定をご覧ください。

投稿をお考えの方は、原稿の仮題と概要（400字程度）、および、できれば原稿種別（投稿規定3.を参照）を、エントリー期限までに、編集委員会宛にご連絡ください。

なお、2022年前半に、当『研究』誌の投稿規定および執筆要領を改訂いたしました。いずれもJADSのウェブサイトに掲載しておりますので、投稿の際にはこれらをご確認ください。また、エントリーを行いました方には、原稿執筆用のテンプレートをお送りしますので、これに沿ってのご執筆をお願いいたします。

JADS会員の皆様からの、ふるってのご投稿をお待ちいたしております。

エントリー期限：2023年9月30日

原稿提出期限：2023年12月15日

査読・編集：2023年12月～2024年5月

投稿規定・執筆要領の掲載先：<http://www.jads.org/pub/pub.html>

連絡先：『アート・ドキュメンテーション研究』編集委員会

kenkyu_editor@jads.org

アート・ドキュメンテーション学会

刊行物販売のお知らせ

2023/6

本学会刊行物をご購入いただけます。お申し込みは毎日学術フォーラムまで（別途送料がかかります）。

◆刊行物バックナンバー

『アート・ドキュメンテーション研究』 第31号	(2023年5月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第30号	(2022年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第29号	(2021年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第27・28号	(2020年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第26号	(2019年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第25号	(2018年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第24号	(2017年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第23号	(2016年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第22号	(2015年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第21号	(2014年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第20号	(2013年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第19号	(2012年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第18号	(2011年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第17号	(2010年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第16号	(2009年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第15号	(2008年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第14号	(2007年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第13号	(2006年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第12号	(2005年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第11号	(2004年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第10号	品切	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第9号	(2001年7月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第8号	(2000年7月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第7号	(1999年9月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第6号	(1997年8月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 (税込)
『アート・ドキュメンテーション研究』 第5号	(1996年8月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 (税込)
『アート・ドキュメンテーション研究』 第4号	(1995年8月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 (税込)
『アート・ドキュメンテーション研究』 第1~3号	品切	
『アート・アーカイヴ：多面体：その現状と未来：記録集』(2010年9月刊)	定価¥500 (税込)	品切
『日本のアート・ドキュメンテーション：20年の達成：MLA連携の現状、課題、そして将来：予稿集・資料編』	(2009年12月刊)	定価¥1,000+税 品切
『国際シンポジウム：東アジアにおける美術・文化財情報のネットワーク化を考える：報告書』	(2005年1月刊)	定価¥1,000 (税込)
『arsの現場とツールの諸相Ⅱ』(ars-WG叢書・2)	(2000年3月刊)	定価¥1,000 (税込)
『報告書：シンポジウム：フランスにおける美術情報の普及と専門教育』	(1998年3月刊)	定価¥1,500+税
『美術情報と図書館：報告書』	(1995年3月刊)	定価¥2,500 (税込)

◆お問合せ・お申し込み

株式会社 毎日学術フォーラム

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル

Tel: 03-6636-0956 (販売直通) Fax: 03-6267-4555 E-mail: maf-sales@mynavi.jp

お申し込み方法: <https://maf.mynavi.jp/sales>

■アート・ドキュメンテーション学会とは

アート・ドキュメンテーション学会は、ひろく芸術一般に関する資料を記録・管理・情報化する方法論の研究と、その実践的運用の追究に携わっています。1989年4月に、美術館/博物館、図書館、アーカイブ、芸術関連機関の新しい連携をめざし、わが国および国際間における文化的感性と芸術関連情報の創発的な協働のために開設されました。

さまざまな出来事や資料を記録・共有する作業は社会生活の根本をなす人間の営みですが、その理念や技術は現代の情報社会で急速に変容し、飛躍的に発展しています。芸術関連のドキュメントの持つ豊かな可能性は、研究・教育機関のみならず、地域のコミュニティーや個人的な活動でも開発される局面にあるでしょう。

本学会には、図書館司書、学芸員、アーキヴィスト、情報科学研究者、美術史・文学史・音楽史・メディア史・文化史・自然史研究者など、約300名・機関の正会員、学生会員、賛助会員が所属しています。従来の美術館/博物館・図書館・公文書館・アーカイブおよび学会といった機関や職能を超領域的に融合する新しい学術団体として、本学会は、新しい未知な課題に取り組む方々の参加をえて、活動を展開しています。

本学会は、アート・ドキュメンテーション研究会として創設され、1999年に日本学術会議の第18期登録学術研究団体(情報学・芸術学)に加入後、2005年4月に現在の学会名に改称しました。その後、伝統ある英国美術図書館協会(ARLIS/UK & Ireland)の*Art Libraries Journal*(2013, Vol.38, No.2)の「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号の刊行に協力するなど、国際的視野にもとづいて現代社会の要請する人文学と情報学との連動を追究しています。

主な定期的活動として、年次大会、秋季研究集会、学会誌『アート・ドキュメンテーション研究』と会員ニュース誌『アート・ドキュメンテーション通信』刊行ほか、さまざまな研究集会・見学会、グループ活動、国際交流を実行

しています。学会内の各委員会・グループはつねに、今日的要請に即したデータベースの構築、アーカイブ・デザイン、また個別的な応用課題の解決に取り組み、着実な成果をあげています。

■活動内容

- ・研究会、講演会、見学会の開催
- ・地区部会とSIGの活動

現在、関西地区部会があり、自由に参加できます。

また、日常活動の場として、会員の興味に応じてSIG(スペシャル・インタレスト・グループ)を結成することができます。現在、美術館図書室SIG、デジタルアーカイブサロンSIG、JADS Archives and Archival Methods SIG(学会アーカイブSIG)があり、自由に参加できます。

(地区部会・SIG連絡先:

<http://www.jads.org/contact/contact.htm#sig>)

- ・インターネット・ホームページ(日本語版・英語版)の開設による情報提供・交換及びメーリングリストによる会員交流
 - ・情報・資料の収集・交換・提供
 - ・アート・ドキュメンテーション関係者の交流
 - ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』の発行
 - ・『アート・ドキュメンテーション関連文献目録』の作成・維持(上記『研究』並びにHPで提供)
 - ・『アート・ドキュメンテーション関係機関要覧』の作成・維持(HPで提供)
 - ・ドキュメンテーション関係諸機関・組織との幅広い連携
 - ・IFLA(国際図書館連盟)の協会会員として、美術図書館分科会の活動への参加・協力
 - ・ARLIS/UK等各国の同種組織との連携
 - ・国際会議等参加支援のための助成金の支給
- その他、この会の活動に必要な事業を行います。

■会員の特典

- ・本学会の行う研究会・講演会・見学会などの活動に優先的に参加できます。
- ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』(年3回)、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』(年1回)の配付を受けられます(賛助会員は各2部送付)。

■年会費〔年度単位〕

会員種別により、以下の会費となります。

- ・正会員 6,000円(ただし、65歳以上は4,000円[自己申告制])
- ・学生会員 4,000円(大学学部、大学院などに在学中の学生。申込時に在学証明書または学生証のコピーを提出していただきます)
- ・賛助会員(個人または機関・団体) 一口以上(一口 30,000円)
- ・団体購読会員 12,000円

■ホームページ

- ・活動の詳細については、ホームページをご参照ください。

<http://www.jads.org/>



■入会方法

- ・HPから「入会申込書」をダウンロードし、必要事項をご記入の上、下記の間合せ先に郵送またはメール添付にてお送りください。役員会にて入会を承認された方に、初年次の年会費の振込用紙を送付します。なお、本学会は会費の入金をもって、入会手続の完了とします。

(入会申込書ダウンロード:

<http://www.jads.org/nyukai/nyukai.html>)



Art Libraries Journal (2013, Vol.38, No.2)

「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号

お問合せ・お申し込み

アート・ドキュメンテーション学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル (株) 毎日学術フォーラム内

Tel : 03-6267-4550 Fax : 03-6267-4555

E-mail : maf-jads@mynavi.jp

2023年6月1日現在

JADS

アート・ドキュメンテーション学会

2023年度 年次大会予稿集

発行日: 2023年6月17日(土)

編集: アート・ドキュメンテーション学会

発行: アート・ドキュメンテーション学会

<http://www.jads.org/>